

年間第三十三主日

マルコ 13・24-32

2012. 11. 18

鈴木 康由（鹿児島教区 助祭）

今日の福音書の中でイエス様は「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを人々は見る」と語られます。この言葉から多くの人はこの箇所を終末の時にイエス様が再びこの世に来られる時の描写である、と考えることでしょう。確かに、その理解は間違っていないと思います。しかし、今日の福音箇所を通じて終末とは世の終わりであり、破滅の時であるような誤解を招いてしまうものです。実に、キリスト教に於ける終末とは、一般的に言われる破滅（カタストロフィー〈Catastrophe〉）のことではなく、神の国の完成のことを意味します。これは歴史が完成に向かうという確信—キリスト教の歴史観—があって初めて語ることができるものです。そして、重要なことは、歴史の完成も神の国の完成も人間の手によって成し得るものではない、ということです。典礼歴では年間が終わり近づく、と一捻りある聖書箇所が好んで選ばれるような気がしますが、今日は難解と思われる終末について、福音がもつ深みを聖書的背景と共に考えていきたいと思えます。

さて、今日と来週の「王であるキリスト」の祭日で読まれる福音を読み解くためには、聖書全体を貫く黙示思想というものを念頭におかなければなりません。「黙示思想」とは何か…ということですが、キリスト教に於いては旧約聖書の創造を踏襲し、イエス・キリストによって新しい天と地が開けたことを第二の創造として考えます（Ⅱペト 3・13；黙示 21・1）。そして、その完成はイエス・キリストによってなされる、というのがキリスト教の歴史観であり、私たちの信仰の源です。つまり、私たちの信仰に基づけば、人間の歴史とは創造の初めから現在に至るまで、すべてはキリストによって、キリストのために、キリストに向けてのみ存在しているのです（Ⅰコリ 8・6、エフェ 1・10、コロ 1・15-20）。ひと言で表現すれば、イエス・キリストを通じて神の救いの歴史が完成するのです。そして、これは神の国の完成をも意味します。今日の福音でイエス様が「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」と語る時、この黙示思想に基づいてご自分を歴史が完成するときに神の全権を帯びてやって

来る審判者であり救済者であることを暗示しているのです。

と、ここまでお話しをすると、聖書の背景のことなどより、では一体誰が救われるのか、ということに当然のことながら興味がそそられます。この点に関して、イエス様は「天使たちを遣わし(て)、一中略—彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」と語られています(13・27)。ここで注意が必要なのは「選ばれた人たち」とはイエス様を信じる人たちだけのことを指しているわけではない、ということです。毎年、年末が近くなると新宿、渋谷、そして池袋といった大きな駅の近くで「回心して福音を信じなさい。主イエスを信じるものは皆、救われるが、信じないものは地獄に墮ち、永遠の苦しみを受ける」などと悲壮感に満ちた鬱陶しいアナウンスを誰しも聞いたことがあると思いますが、如何にも胡散臭く響きませんか。もし、これを「なんかおかしい」とか「ちょっと怪しい」と感じられるようであれば正統信仰を生きている、ということですが。聞くところによると、某キリスト教系の新興宗教では、来るべき終末、つまり世の終わり、破滅(カタストロフィー)の時、自分たちの教えを信じた者だけが救われる、という恐怖感と安心感を人々に刷り込んで宣教をしているようです。こうした宣教がある程度、功を奏している、というのですから、人間の心の奥深くには何とも言えない不安感が横たわっているのでしょうか…。彼らは今日の福音箇所と神の国、即ち、終末というイエス様の福音の中核が正しく理解できていないことから、意味を取り違えてしまうのだと思われます。だったら、正しい理解を伝えているカトリックの宣教に実りが少ないのはなぜか、と聞かれても困ってしまいます…(苦笑)。

さてさて、少し話が逸れましたが、イエス様が語る「選ばれた人たち」とは、今日の福音箇所のちょっと前にある「だれ一人救われない」という言葉を受けたものです(13・20)。この箇所は原文では「あらゆる肉は救われない」と表現されています。なぜ「人」ではなく「肉」という言葉が使われているのでしょうか。それは福音書に於いて「肉」とは罪を犯してしまう人間の弱さを表象しているからなのです。そして、この“弱さ”はキリスト信者であろうがなかろうがすべての人が等しく持っているものです。だからこそ、「選ばれた人たち」とはイエス様を信じる者だけを意味するのではない、と断言できるのです。ここから分かるように、「選ばれた人たち」とは、“イエス様が選ばれた人たち”なのですから、キリスト教の救いは誰にでも開かれている、ということになります。逆に考えれば、神の国は誰にでも開かれている、ということにイエス様の福音の中核である神の国の特徴があるのです。しかし、神の国はこうした“誰

にでも開かれている”という解放性と“すべての人に開かれているのではない”という閉鎖性を併せ持っています。一見すると矛盾したことを言っているように思えるでしょうが、マタイ福音書にははっきりと「わたしに向かって『主よ、主よ』という者が天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入る」というイエス様の言葉がこのことを表しています(マタイ7・21)。つまり、救われるか救われないかを決めるのは洗礼を受けているかどうか、ということではなく「父の御心を行う者」であったか否か、ということなのです。言い換えれば、イエス様と共に神の国が実現のために神への愛と隣人愛の実践を心がけてきたか、ということが問題とされているのです。留意すべきことは、“今までしてきたか”という結果が問われるのではなく、“しようとしてきたか”という私たちの内面が問われるのです。誰しも様々な状況下であって、“しようとしたけれどもできなかった”、という後悔が少なからずあることでしょう。神様はその“できなかった”という悔やみ、即ち、御心に叶うことができなかったという“思い”を汲んでくださるのです。キリスト教に於ける救いの主体、イニシアティブは神様やイエス様にあるのであり、私たちが“何をしてきたか”という結果に基づく報いなどではないのです。

今日の話をもとめるとキリスト教の歴史観とは、イエス・キリストを中心とした神の救済史であることに最大の特徴があります。イメージとしては、歴史は天地創造から始まり、来るべき終末、即ち、新しい創造に向かって伸びる直線として理解することができます。そして、神がこの歴史の外に超越的原因として措定されています。つまり、この創造から終末にかけて直線で描ける歴史の外に神様はおられ、そこから人類の歴史を救いへと導かれるのです。ではイエス様はどうでしょうか。真の神であり真の人であるイエス様は、神様から遣わされ、この地上ですべてのものの救いとなる神の国の福音を人々に宣べ伝えました。忘れてはならない点は、神様は歴史を越えたところで、イエス様は人間となり歴史の中で、この世界を救いに導いてくださっている、ということです。つまり、神様とイエス様は歴史の外と内の両面から、この世界を救いに、即ち、神の国の完成に導かれるのです。今日の福音の最後でイエス様は「(終末が来る) その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存知である」(13・32)と語られました。ここで、どうして父の独り子であるイエス様すら知らないのか、という疑問を持たれる方もおられるでしょう。しかし、思い出してください。今まで話してきたキリスト教の歴史観を。私た

ちの歴史は神の救済史なのです。そして、この救済史の中でイエス様が遣わされたのです。だからこそ、完全なる救いの時、即ち、終末は父なる神しか知りえないのです。

今日は「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを人々を見る」との言葉から、キリスト教が伝えてきた「終末」ということと神の国の開放性と閉鎖性という二面性を中心に考えてきました。特に大切なことは創造から終末というキリスト教の歴史観、即ち、歴史は神の救済史である、という理解です。この歴史観があるからこそ、イエス様は救い主なのです。だからこそ、イエスはキリスト…イエス・キリストなのです。キリスト教信仰の中核である神の救済史の中でイエス様が遣わされた、ということ、即ち、神様の人間に対する愛をこれから始まる待降節の間に今一度考えて見ましょう。こうしたキリスト教の大枠を理解したうえで私たちの信仰を振り返ることが、信仰年にあたって私たちに求められているように思えます。